

各章で示された地理的な見方・考え方、地域の読み解き方を、本書が取り上げていない他の地域に応用して考えてみるという活用の仕方も想定される。それは小・中学校や高校の地理の授業および大学の教職科目でも実践できることであり、その意味で本書は地理教育の良い教材になる。一方で本書には、事例とした各地域の性格や構造を理解する上で、どこの何に注目すればよいかが提示されているともいえ、当該の地域で巡検を実施する際のハンドブックとしても有用である。

このように本書は、地理教育（地誌教育）の実践的教科書として価値があり、大学の地理教員、教職課程で地理を学ぶ学生だけでなく、小・中・高校で地理を教えている方々にも、是非手に取っていただきたい書籍である。

(山下亜紀郎)

三木一彦：『房総で講はいかに継承されてきたか—信仰の地域誌—』古今書院，2024年9月刊，190p.，3,500円（税別）

本書の目的はタイトルにあるように、房総半島において講集団（組織）がどのように成立し、そして現在までいかに継承されてきたかを明らかにすることである。講とは「宗教上の目的を達成するために、信仰を同じくするものが寄り合つて結成している信仰集団」と定義されるが（民俗学研究所編，1951：189）、時代を経るにつれて互助的な金融組織や職人仲間にもとづく講なども作られた。民俗学者の櫻井によれば、講は大別して宗教的講、経済的講、社会的講があり（櫻井，1976）、本書はそのなかで宗教的講の性格をもつ出羽三山講（三山講）の浸透と継承の地域的背景を、郷土誌、紀行文、民俗調査報告書、講関係文書、石碑などの多様な資料に加えて、著者のフィールドワークによって明らかにされる。

本書は2024年から刊行が始まった「シリーズ日本の地域誌」の一冊である。監修者の米家と山村によると、本シリーズの意図は「日本を構成しているさまざまな地域のなかから、いくつか典型的な地域のあり方を選んで、その地域ならではの特徴がいかに形づくられたかを歴史地理学的に示すこと」とされる。また、本シリーズの書名はいずれも「なぜ〇〇地域は〇〇となったのか」といった問いかけの形式をとっており、読者は「その問いへの答えを想像しながら読み進め」ることができる（米家・山村，2024：ii）。以下ではこうした狙いを視野に入れつつ、本書の内容を紹介したい。

本書の構成は次の通りである。

はじめに

第1章 対象地域の概要

第2章 巡礼と諸寺社への参詣

第3章 出羽三山信仰と地域

第4章 信仰の重層性と地域社会

第5章 むすびにかえて

「はじめに」は本書の基底となる宗教および地域の捉え方が議論される。本章前半では日本と西欧の「宗教」概念を比較しつつ、日本人は多くの宗教儀礼や年中行事とともに生きており、そうした宗教のありようを地域の特徴と関連させながら描き出すという観点が示される。後半は房総半島の地域性が歴史的に、東京湾などの内海、「黒潮の道」ないし外海、そして関東地方という三つの関係によって規定されており、これら外部との関わり（交流）を視野に入れた考察が不可欠であることが述べられる。

「第1章 対象地域の概要」は、本書の対象地域である房総半島の長生地域および一宮町の沿革について、生業や地域間交流を中心に言及される。長生地域は茂原市と長生郡白子町、一宮町、睦沢

町、長生村など1市5町1村を範囲とする地域で、当地には上総国一宮の玉前神社^{たまさき}、二宮の橘樹神社^{たちばな}などの由緒ある神社が鎮座するとともに、平安時代創建の天台宗寺院が多数みられるなど歴史的に重要な場所であった。江戸時代になると、西国の出漁者を中心とした漁業集落が形成され、農業に加えて漁業や商業なども大きく成長した。著者はこの諸産業の発展に注目し、それが「本書の通奏低音ともいうべき長生地域の大きな特徴」と位置づける。諸産業は明治以降も維持されるものの、戦前期に天然ガス採掘が始まった茂原市が元々の中心地であった一宮町に代わる地域の拠点となった。ただ、近年の一宮町は千葉駅以遠の東京大都市圏に組み込まれたこともあり、長生地域のなかで唯一人口が増加している。

「第2章 巡礼と諸寺社への参詣」は、江戸時代の巡礼地と寺社参詣の動向が扱われる。房総半島には坂東三十三カ所観音巡礼の札所の3分の1ほどがあり、長生地域には第33番札所の笠森寺、隣接するいすみ市に第32番札所の清水寺^{せいすいじ}が所在する。また、同半島には江戸時代以降に「写し霊場」が多数開設され、上総国内に限っても18の霊場があったとされる。札所のなかには別の霊場の札所を兼ねることも多く（笠森寺は上総三十四カ所観音巡礼の第1番札所でもある）、ひとつの札所に複数の霊場が結びついていた。他方、著者は長生地域の寺社参詣を分析し、出羽三山や善光寺、伊勢神宮などへの代参講を含む遠近さまざまな寺社への参詣があったことを述べるとともに、絵馬の奉納や参拝記念碑の建立などの信仰を可視化するモノの存在に注意を向けている。

以上の章を経て、「第3章 出羽三山信仰と地域」では対象地域における出羽三山信仰の様態が詳述される。出羽三山は江戸時代に東北から関東地方にかけて信仰が広がった。そのなかで関東地方、とくに房総半島は出羽三山信仰の篤信地域として

知られ、参拝記念の意味もある三山碑の建立状況を見ると、千葉県は山形県に次いで多く建立されている。房総半島では出羽三山の登拝者を「行人^{ぎょうにん}」と呼び、老人への通過儀礼（イニシエーション）として重視されてきた。また、三山講の講員は居住する村落の行事に重要な役割を果たすことが少なくないとされる。長生地域も同様の特徴を有し、三山講の行事のほかに五穀豊穡を中心とした集落の諸行事に関わっていること、その関わりは地域により差異があること、また地域には三山講を含めて性別・世代ごとに所属する講が併存していることを明らかにしている。

前章をふまえ、「第4章 信仰の重層性と地域社会」では三山講の浸透と継承の要因を房総半島の文化的・社会的基盤との関係から検討される。まず、著者はこの地域には元々「海上他界」に関わる熊野信仰があり、それが出羽三山信仰の広がりななかで、熊野信仰から出羽三山信仰に代替し、浸透していったことを述べる。また、著者は当地域の年齢階梯的な社会構造に注目し、老人の集まりである三山講が単に宗教的講としての性格だけでなく、集落の行事や運営の一端を担う年序集団として地域の側から必要とされていたことが講の継承につながったのではないかと指摘する。

「第5章 むすびにかえて」はこれまでの章で明らかとなった点を現代社会と関連づけて議論される。すなわち、三山講の老人の集まりという側面が「居場所」の減少や無縁化といった現代の諸課題の解決に示唆を与えること、またそうした見方を提供する歴史地理学の役割は大きいことが述べられる。

講に関する研究は鈴木（1940）や櫻井（1962）などを嚆矢とし、近年は長谷部らのグループによる一連の成果がみられる（講研究会編集委員会編、2022）。ただ、既往の研究は講の活動実態や「人間結合」のあり方に注目する傾向にあり、「講が

いかに継承されてきたか」という観点からの研究は多くなかった。そのなかで、講の浸透と継承を地域の文化的・社会的基盤との関係から明らかにした本書は講研究における新たな成果と位置づけられよう。また、著者は前著で江戸時代の三峰信仰の広がりを地域的基盤と結びつける形で考察したが(三木, 2010), こうした視点は本書においても貫かれているとともに、その対象時期を現代まで発展・深化させたと捉えることができる。

一方、宗教社会学者の天田によると、従来「人びとの暮らしのなかにあった講」が、近年は文化遺産(貴重な民俗資料)や観光資源として、また失いつつある地域の「つながり」を結び直すものとして捉えられはじめているという(天田, 2014)。後者のつながりという点は著者が第5章で示した講の現代的意味とも関連する。今後はこうした従来とは異なる文脈のなかでの講活動のあり方や意味づけ、またその「変化」に対する講員および地域の意識などについて注視していくことも必要かもしれない。

最後に、本シリーズには本書と同じく宗教を扱った今里悟之著『平戸の島々はなぜ宗教が多彩なのか一島の地域誌一』が刊行されている。同書は長崎県の平戸島を対象に、カトリック、神道、仏教、修験道などのさまざまな宗教の混在・融合を考察した内容であり、本書と比較しつつ読み進めることで地域と宗教の関係をさらに理解することができるだろう。こちらも一読をお勧めしたい。

(卯田卓矢)

文 献

- 天田顕徳(2014): 講の社会的位置づけの変遷, および講研究の射程に関する一考察. 長谷部八朗編『「講」研究の可能性Ⅱ』慶友社, 284-314.
 講研究会編集委員会編(2022): 『人のつながりの歴史・民俗・宗教一「講」の文化論一』八千代出版.
 米家泰作・山村亜希(2024): シリーズ「日本の地域誌」

に寄せて. 三木一彦『房総で講はいかに継承されてきたか一信仰の地域誌一』古今書院, ii - iii.

- 櫻井徳太郎(1962): 『講集団成立過程の研究』吉川弘文館.
 櫻井徳太郎(1976): 講. 和歌森太郎ほか編『日本民俗学講座3 信仰伝承』朝倉書店, 97-120.
 鈴木榮太郎(1940): 『日本農村社会学原理』時潮社.
 民俗学研究所編(1951): 『民俗学辞典』東京堂.
 三木一彦(2010): 『三峰信仰の展開と地域的基盤』古今書院.

須山 聡: 『奄美雑話: 地理学の目で群島を見る』海青社, 2024年2月刊, 127p., 1,700円(税別)

本書は、著者が奄美群島の主要紙である南海日日新聞に連載を続ける『新・奄美群島の地域性』の記事をもとに、それを加筆・修正し、刊行されたものである。著者の須山聡氏は、1980~90年代、石川県輪島市の漆器産業地域をはじめ、主に在来工業に関する地理学的研究に取り組んでいた。そんな彼が、研究者として大きく舵を切ったのは、2001年のことであり、大島紬産業の視察に行っことが契機になったという。この時、奄美の魅力に惹きつけられた著者は、それ以降、奄美大島を中心に奄美群島へ足繁く通うことになる。現在では、奄美研究、さらには日本の島嶼研究を牽引する研究者へと見事に転身し、加えて、奄美観光大使も務めている。

2014年、著者は『奄美大島の地域性: 大学生が見た島/シマの姿』を刊行した。ここから、前述の連載記事のタイトルに“新”が付けられた理由が推察できよう。また、奄美大島を中心としながらも、連載記事は同紙の主な取材対象地域である群島の他の島々も包含している。10年前の前作は、研究活動・教育活動を融合させながら、多種の地理学的ツールを巧みに駆使した、過去10年間の学術的成果であった。対する今作は、新聞の連載記事を通じた、奄美群島民に向けたアウトリーチ活動と政策提言を集約したものである。書